

連載

高大接続の課題に迫る

第4回

事例 金城大学 医療健康学部

入学後の 進級・修学状況を 改善する

2014年秋号にスタートした連載「高大接続の課題に迫る」では、これまで3回にわたり、高大接続に関する調査結果報告を通じて、その課題を明らかにし、課題の克服に向けた方向性を示してきた。今号は、実際の高校・大学の現場で高大接続の課題に向き合い、それを克服しつつある事例を取り上げる。それは、石川県にある金城大学医療健康学部だ。高大接続の課題解決に向け、入試制度・入学前教育・入学後の初年次教育の改革に力を入れている。

進級と修学状況のデータ分析を基に 入試、入学前教育、初年次教育を改善

進級と修学状況の データを分析する

石川県白山市に位置する金城大学は、2000年4月、社会福祉学部を設置して開学した。2007年度に医療健康学部（理学療法学科、2013年度には作業療法学科を増設）、2015年度には看護学部も設置し、現在は3学部体制となっている。

理学療法学科では理学療法士の資格取得を目指している。北陸3県を中心に200か所以上の病院や介護老人保健施設などと提携し、1年生から実習科目を盛り込み、学生が実践的に学べるようにしているのが特徴だ。理学療法士国家試験の合格率は、2014年3月卒業の4期生が98.7%（受験者数77人中、合格者数76人）と、全国平均合格率の83.7%を上回る実績を挙げている。現在、学生数は286人、専任教員数は14人。

その同学科が、2011年度、1期生

の卒業を機に1～4期生の修学状況を分析したところ、学生の転学・退学の実態が数値として明らかになった（図1）。医療健康学部長補佐の木林勉教授は、次のように説明する。

「本学科ではアドミッションポリシーに則って入学者を選抜しているにもかかわらず、多くの学生が学修についてこれられないという状況は大きな問題です。早急に対策が必要だと、学科内で検討しました」

同学科では、「入試」「入学前教育」「初年次教育」の3つの観点で改善を図った。それぞれについて見ていく。

推薦入試を見直し 入試の適正化を図る

まず着目したのが入試だ。同学科では、AO・学校長推薦・社会人選抜・一般・センター試験利用の5つの入試方式を実施している。この形態別に、1～4期生の転学・退学率、およびGPAを分析した。すると、学校長推薦入試での入学者の卒業率と

GPAが最も低いことが分かった。その原因について、医療健康学部の山本拓哉講師はこう話す。

「学校長推薦入試合格者は、合格から大学入学までの学習機会が少ないようです。しかし、入学後は国家試験合格に向けてハードな学修となります。推薦入試で入学したものの、結局、授業についてこれずに留年し、退学につながっていました。そこで、学生の入学時の学力などを見ながら、特に指定校推薦入試を見直しました」

その結果、2012年度入試では35校あった指定校が、2014年度入試では13校、2015年度入試では10校となった。高校側には、出身学生の入学後の状況を説明しながら理解を求めた。

「学校長推薦入試の志願者は、推薦基準に達している、医療系の資格が取れるといった理由で受験し、理学療法士がどういう職業なのかを十分理解せずに入ってしまう学生が目



医療健康学部長補佐、
教授

木林 勉

きばやし・つとむ

金沢大学大学院医学系研究科博士後期課程修了。博士（保健学）。富山市民病院勤務を経て、2008年から現職。



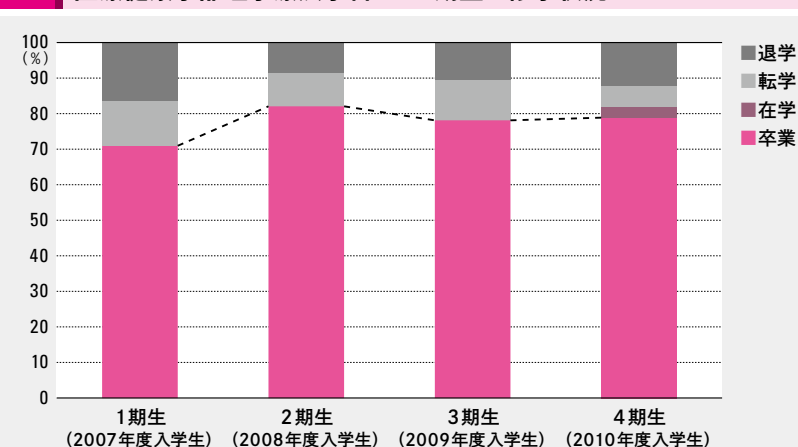
医療健康学部講師

山本拓哉

やまもと・たくや

藤田保健衛生大学大学院保健学研究科修士課程修了。修士（リハビリテーション学）。西諫早病院勤務を経て、2007年、金城大学に赴任。

図1 医療健康学部理学療法学科1～4期生の修学状況（2014年度末現在）



*同大学の資料を基に編集部で作成

立ちました。本学科の特性上、ミスマッチを起こしたら、転学・退学という選択肢しかありません。そうした学生の状況を高校側に説明し、目的意識が明確な生徒を推薦してほしいとお願いしました」(木林教授)

同じく、合格から入学まで学習機会の少ないAO入試では、2012年度入試から基礎学力を測る「基礎教養試験」を新たに課した。更に、その後の検討により、翌2016年度入試でAO入試を廃止することにした。基礎教養試験では学力を正確に測れず、また募集人員も若干名のため、ほかの入試方式に割り当てることにした。

併設校との交流を充実させミスマッチを防ぐ

併設校の推薦入試入学者にも、転学・退学が目立った。理学療法学科には併設校推薦入試で最大6人が入学するが、例年、留年する学生が多かった。併設校には、希望進路に応じた3つのコースがあり、その1つが金城大学や金城大学短期大学部への進学を目指す「金城大学コース」だ。このコースには、志望学部・学科に応じて「社会福祉」「幼児教育」などのクラスがあり、各学部・学科と模擬授業などの交流をしていた。理学療法学科はその内容を大幅に見直した。

「交流事業をしても、ほかの推薦入試での入学者と同様に、理学療法士についての理解が不十分なまま入学している学生が目立ちました。単なる模擬授業から一歩進め、高校生が主体的に授業を受け、進路相談をしてくるような情報提供と支援を目指しました(図2)」(木林教授)

そこで、2012年度に学部全体で始めたのが「交流授業」だ(図3)。高校生が年2回(3年生は年1回)、大学を訪れ、模擬授業を受けるというもの。高校生が理学療法士・作業

療法士についてイメージできるように、段階を追って説明する。

毎回、授業の最後には、その日に学んだこと、その時点での希望職業を振り返りシートに記入させる。そして、高校側から提供してもらった参加者の高校での成績表と振り返りシートを基に、参加者一人ひとりと面談を行う。高校生がこれらの仕事をどのように捉えているのか、数学や理科の学習はどの程度進んでいるのかを確認し、アドバイスをする。

「生徒の成績の変化を追い、前回の面談が生きているのかも確認しながら、力を入れるべき科目など、具体的に助言しています。」(山本講師)

そのような交流を積み重ねるうちに、高校1年生では約20人いる参加者は、2年生では10人台となり、3

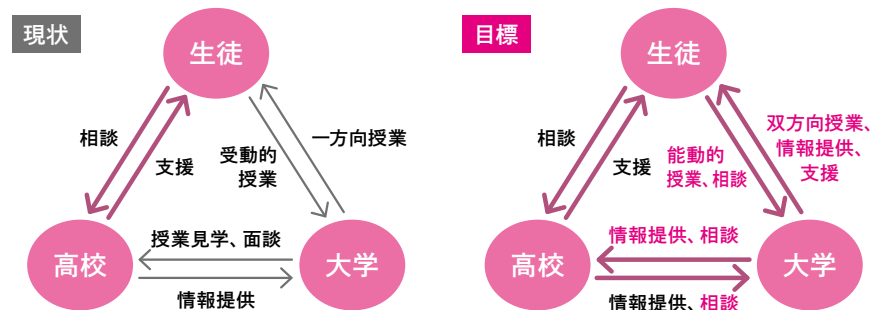
年生になると更に絞られるという。

「1回目の交流授業では、希望職業にホテルマンやウエディングプランナーと書く生徒もいますし、保護者に『医療の資格を取っておくとよい』と言われたから来たという生徒もいます。まだ高校1年生ですからそれでもよいと捉えています。大学教員との交流を通して志望を明確にしていき、最終的に心から理学療法士・作業療法士を目指す生徒が入学してくればよいと考えて取り組んでいます」(山本講師)

高校側も同様のスタンスで進路指導をしてほしいと考え、高校に学長や学部長と出向き、趣旨を伝えた。

「本学部は他学部比べて学習量が多いこと、資格取得を目標とする学部であり、入学後の進路変更が出来

図2 併設校との高大接続で目指す姿



*同大学の資料を基に編集部で作成

図3 医療健康学部と併設校との交流授業

	1コマ目	2コマ目	3コマ目
高校1年生前期	理学療法について(座学)	作業療法について(座学)	生徒面談
高校1年生後期	基礎医学について(解剖学:人体の構造を学びましょう)	卒業生講話(大学3年生)	生徒面談、グループ学習
高校2年生前期	基礎医学について(生理学:高校までに学ぶ物理・化学・生物の知識を使い、身体の仕組みを理解しよう)	高校授業(理科)について(理学療法・作業療法で求められる授業[理科]の素養)	生徒面談、グループ学習
高校2年生後期	理学療法について(重心と身体の関係と色々な移動方法)	作業療法について(身体の不自由な方の着替え)	生徒面談、グループ学習
高校3年生前期	理学療法について(自分の体を意識して動かそう)	作業療法について(身体の不自由な方の食事動作)	生徒面談、進路指導

医療健康学部理学療法学科・作業療法学科の教員各1人が交流授業の担当者となり、継続して高校生と交流する。1コマは50分。上記は2013年度からの内容。2015年度は3年生後期を加えて、3年間で6回の予定。

*同大学の資料を基に編集部で作成

ないため、資格について深く理解できるように指導をしてほしいと伝えました。交流授業でも生徒に話している内容ですが、高校の先生からも重ねて説明してもらうことで、生徒の資格への理解が深まることを期待しています」(山本講師)

提出課題のある教科学習を入学前教育で実施

学校長推薦入試・AO入試での入学者に対する入学前教育も改善した。以前は、入学後のリメディアル教育で教科書として用いる生物の専門書の講読を課題としていたが、2015年度入学者には、数学・物理・生物・国語の学習課題を出した(図4)。

「高校の先生に、推薦入試の合格者は入学まであまり学習しないと聞きました。それでは、一般入試での入学者と学力差が開くばかりです。学習習慣と基礎学力の定着のために、通信添削の課題を出しました」(山本講師)

この課題は任意であり、費用は入学者の負担となるが、ほぼ全員が受講。10~12回の提出課題もきちんと

と提出していたという。成果は、新入生を対象に毎年4月に行う基礎学力試験で測り、例年の成績と比較し、次年度以降もこの形式を継続するかを検討する予定だ。

併設校推薦入試での入学者には、学校長推薦入試等での入学者と同じ学習課題に加えて、交流授業の一端として入学前教育を実施した(図4)。医療への関心を高めることと、文章力向上を狙いとして、新聞記事や感想をまとめる課題などを出し、月1回の面談も継続した。

「入学後の学習についていける基礎学力を付けることも大切ですが、安心して学習に取り組める環境も重要です。交流授業に継続して大学教員との関係を築き、入学者同士が顔見知りとなれるような、交流の機会としました」(木林教授)

月1回の面談や評価表で学生の状況を把握

初年次教育も大幅に見直した。まずは担任制度の充実だ。元々、各学年に3人の担当教員を付け、更に3・4年生では研究室に所属するこ

とで、教員に学修相談できる体制を採っていた。しかし、1・2年生で留年する学生が多く、その学修不振が退学へとつながっていた。入学後からの丁寧な個別対応が必要だと考え、2011年度、1・2年生でも少人数の担任制を導入した。同学科の教員12人が、1人当たり1学年6人前後の学生を受け持つ。

大きな特徴は、月1回の面談だ。学生は、毎月15日までに、「達成度自己評価表」(以下、評価表。図5)を提出する。自分の学修と生活を振り返り、次の目標を立て、その実現に向けての方策を考えるという内容だ。教員はこれを見ながら面談し、状況に応じたアドバイスをする。

評価表の提出期限が過ぎたり、面談に来なかったりすれば、何か問題を抱えているのかもしれないという意識を教員が持てるようになり、早めの対応が可能となった。「欠席がちな学生について、『あの学生はどうしているかな?』という雑談で終わらせるのではなく、『こういう学生がいる』と教員同士が情報交換をし、放置せずに支援する仕組みが出来ました」と、木林教授は評価する。

面談と評価表は、学生の学習意欲やキャリア観の醸成にも役立っている。4月に書く評価表には、どの欄も1行くらいしか書かれていない。教員が面談で学生の思いを引き出し、それを書くようにと指導すると、翌月の評価表には記入が少し増え、また助言するという繰り返しによって、自らを振り返り、考え、目標を立てられるようになっていくという。

更に、理学療法士の資格を持つ教員と1年生から直接話すことで、職業観や将来像を描きやすくなっていると、山本講師は話す。

「1年生で学ぶ科目が資格にどのよう

図4 2015年度入学者に対する入学前教育の内容

学校長推薦入試、AO入試による入学者対象

- 「数学と物理」「数学と生物」(どちらかを選択)、「国語」から任意で1~2科目を選択。いずれの科目も、医療従事者として活躍するために必要な教育の基礎となる内容。
- 期間は1月中旬~3月上旬。DVDとテキストで学習し、10回または12回の確認テストを提出。

併設校推薦入試による入学者対象

12月

- 自己評価表に記載し持参
- 学生個人票記載
- 学生による入学前の課題検討
- 教員と相談による課題決定
- 集団面談、個別面談
- 生理学授業見学(30分)

1~3月

- 自己評価表に記載し持参
- 集団面談、個別面談
- 課題の確認・質問
- 生物1単元のプレゼンテーション(5分)

入学前課題

- 毎日、新聞を読む
- 毎日、新聞で興味のある記事をスクラップする
- 週1回、興味のある記事をA4判1枚にまとめる
- 入学前教育の学習内容を理解する
- 入学事前課題として行ったことを全てファイリングする
- 月1回、面談をし、進捗状況を報告する

*同大学の資料を基に編集部で作成

『この学習は意味があるのですか』と面談で質問する学生もいます。そうした質問を出来るのも面談ならではの思いですし、有資格者が答えることで学生は納得して学習に取り組めるようです」

併設校からの入学者は、交流授業で3年間、面談を担当した大学教員をそのまま担任とし、指導の継続性を持たせている。

「基礎演習」で、学修方法の習得、友だちづくりを支援

1年生の必修科目「基礎演習」も2013年度に改善した。前期の「基礎演習Ⅰ」では、学生が実際にグループワークやプレゼンテーション、レポート提出などをしながら、大学での学修方法を身に付けていく。そして、後期の「基礎演習Ⅱ」では、理

学療法士の基礎を題材として、「基礎演習Ⅰ」で学んだ学修方法を実践するという内容にした。

『「基礎演習」には、スタディスキルズを学び、理学療法士としてのキャリア観を醸成し、学修意欲を高めていき、更に、協働学習を通じて人間関係を築くという、いくつもの目的があります。転学や退学を防ぐためには、学力だけでなく、人間関係も重要です。大学で学び、生活するための基盤をつくる科目と位置付け、授業内容を考えました』(山本講師)

特徴的なのは、「基礎演習Ⅱ」(全15回)だ。早期から学生と教員が顔見知りとなれるように、1年生と接点の少ない教員がリレー方式で1回ずつ授業を担当。自分の専門分野を中心に、1年生に知ってほしいことをテーマに60分間講義をする。後半

30分間は、その話を基に最大6人のグループで討論をする。授業後、学生は個別にレポートを提出。講義を担当した教員が、この科目のルーブリックを基にレポートを採点し、学生に返却する。更に、4週ごとの「振り返り」の授業で、3人で1グループとなり、互いのレポートを教員と同じルーブリックを基に採点する。学生は責任を持ってレポートを読み、厳しい指摘もする。他人のレポートを読むことによって、自分のレポートの振り返りにもなるという。

「本学科では1年生から実習があり、毎週多くのレポートを書きます。それらの質を上げるためにも、教員の採点だけでなく、ピアレビューを取り入れまし

た。また、チーム医療が重視されているように、理学療法士にもコミュニケーション能力が必要です。自分の考えをはっきり言う、相手の意見をしっかり受け止める経験を積みせようと、このような形態としました」(木林教授)

学生約100人に対し、担当教員は5人。教員はファシリテーターに徹し、グループワークは学生主体で進める。人間関係が広がるようにと、グループワークのメンバーは毎回変えている。大教室の授業だが、学生が能動的に学ぶ姿が見られるという。

主体的な学びに導くために高校と積極的に連携したい

1期生の卒業を機に、修学状況分析から入試や教学の改善を始めて4年目となった。卒業率が7割から8割に改善し、授業や面談の様子では、学生の学修姿勢は良い方向に変化しつつあるという。今後の課題の1つは、教員の意識統一を図り、取り組みの質を上げていくことだと、木林教授は語る。

「学生と教員がなるべく多く接するように申し合わせていても、教員によって温度差があり、活動内容はまちまちです。その差が学生の学修意欲をそがないようにしていくことが重要だと考えています」

高大接続の課題には、併設校以外の高校教員との関係づくりを挙げる。

「模擬講義の依頼を受けたから高校に行くのではなく、大学側から高校教員や高校生にもっと接点を持つべきだと考えています。併設校と行っているような情報交換を他校とも出来るような関係を築き、高校、大学と継続して一人ひとりに丁寧に支援することで、『なりたい自分』を目指すための大学での主体的な学びに結び付けたいと思います」(山本講師)

図5 「達成度自己評価表」

達成度自己評価表 (5.6.7.11.12.1月) 修学担当教員	
学履番号	氏名
到達目標 (1か月後: 月 日) 具体的に記載してください	
到達目標 (平成 年度今学期終了時)	
【重要】この1か月での自分の変化点、良かった点、今後継続していきたい点	
●満足できていることや反省すべきこと、およびこれらを一層発展させる方法や改善方法を具体的に記載してください。	
授業出席率 _____ %	この1か月の自己評価点数 _____ 点
授業時間外学習時間 1日平均 _____ 時間	
授業各回の内容理解度 (各科目ごと具体的に記載)	
【重要】到達目標達成に向けての方策	
自由記載 (生活、課外活動、健康、アルバイトなどなんでも)	
教員コメント	

「達成度自己評価表」は、教員がコピーを保管し、原本は学生が管理する専用ファイルに綴じる。4年間分の学修の推移を把握できる。
*同大学の資料をそのまま掲載